



# ジョニー 放浪記



リディア

## ジョニー放浪記 (1)

---

おいらは猫（ターキッシュアンゴラ）のジョニー  
訳あって放浪中にゃ



世の中には凄いマタタビがあるっていうにゃ  
なんでも食べると凄いらしいにゃ

その名も【宝樹マダム】  
それから採れたマタタビはとっても芳醇で

どんなおんにゃのこでも  
メロメロらしいにゃ

決してそのなんだにゃ。。  
不純な動機じゃないにゃ



ただ隣のお屋敷に住むアンジェリーナちゃん（ピクシーボブ）に  
あげただけにゃ

あげてメロメロになって  
おいらにずきゅーんってしてほしいなんだにゃ

☆\* ° ° \* ☆\* ° ° \*

「お嬢さま!!大変です」

「何よレオン  
今いいとこなのに」

「それがジョニーがどこにもいないのです  
心配で心配でッ!!!」

「ああ  
あのすけべな猫ね  
まったく誰に似たのかしらねえ・・・」

「お言葉ですがお嬢さま！  
ジョニーはそんなスケベではありません。  
ちょっぴりわたくしに似ているだけでございます！」

(いや・・・それがすけべでなくて何なのかしら・・・)

「何かおっしゃいましたか!!!」

「まったくあなたはジョニーのことになると・・・  
そのうち帰ってくるわよ  
あの時もそうだったじゃない」

「そうでございますね・・・  
!  
あのときはお嬢さまが!!!」

「はいはい  
わたくしが悪かったわよ  
謝ったじゃないあのときに  
とにかくもうちょっと待ってみたらいかが？」

「分かりました  
わたくしレオン待つ勇気も必要でございますね」

「そうよ  
それより  
おかわり持ってきて頂戴」

「畏まりました  
お嬢さま」

☆\*° ° \*☆\*° ° \*

あれからどれくらい来たかにゃ  
今日はここで野宿にゃ・・・

## ジョニー放浪記 (2)

---

やっぱり夜になると寒いにゃ～  
給仕のマリーから貰った弁当を食べようかにゃ

厳密に言えばにゃ。。  
その・・  
こっそりもらってきたにゃ～  
どうぞお食べくださいって感じに置いてあったんだにゃ  
いつもは鬼のようにおいらを追いかけてくるんにゃが  
今日に限って追いかけてこにゃかったから  
おいら・・  
らっきい～いえ～い！って思ったにゃ  
でも大事に食べないとだにゃ  
もぐもぐ  
！！  
うまいにゃ！  
も、もうちょっとだけにしようかにゃ・・

ぱくぱく・・  
あ、あとちょっとだけにゃ。。  
ごくん  
た、大変にゃ・・  
結構食べちゃったにゃあ～～～

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「おい又八ここか？  
さっき見慣れない猫が入っていった小屋は」

「へいおやびん  
あっしにまちげえはないでありんす」

「そうか・・  
うちのシマに入り込んでくるとはいい度胸だな」

「そうでげす！  
フトドキものでげす！  
おやびんやっつけてくんまし！」

「又八・・  
いつもいってるが  
俺は親分でもないし  
なによりその呼び方は好かん

Bossと呼べといってるだろうが！」

「へ、へい  
もうしわけねっすBoss!!!!」

「そのしゃべり方も好かん  
いつも思ってたが・・・どうにかならんか？」

「申し訳ねっす  
なんせうちの元ご主人さまが  
時代劇ばかり見ていたものでゲスから」

「まあよい  
俺のナワバリに入り込んだ輩が先だ！  
いくぞ又八！」

「へいおやびん!!!!」

...

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ぎょっと睨み付けられ、さらに萎縮する又八  
申し訳なさそうにトボトボと  
黒い影の後をついて小屋に向かう

## ジョニー放浪記 (3)

---

はあ～

アンジェリーナちゃんは今どうしてるかにゃ～

おいらに会えなくて寂しがってたりしてないかにゃ  
そうだったらおいら・・・

うううれすうい～にゃあああ

「貴様！  
そこで何をしている！」

背後から響く低い声に  
ジョニーは振り返る

「え？  
何かにゃ？  
アンジェリーナちゃんを想いながら  
妄想してただけにゃ  
なんで、分かったにゃ？」

「おやb  
あ！  
Boss!!  
アンジェリーナちゃんって誰でゲス？」

「俺が知るか」

「なんかあいつ苦手でありんす・・・」

再度視線をジョニーに

「ここが俺のシマと知って入って来てるのか？」

「シマ？縄張りのことかにゃ  
それは知らなかったにゃ  
今から出て行くから許して欲しいにゃ」

「そうやすやすと俺が逃がすとでも？」

「だ、だめにゃ  
おいらはここで倒れるわけには行かないにゃ  
【宝珠マダム】を見つけるまでは！」

「貴様今なんと言った？」

片目を瞑り睨みつける

「え？倒れるわけにはいかないにゃ かにゃ？」

「違うその後だ

【宝珠マダム】と言わなかったか？」

（おやびん・・・しっかり聞こえてるでゲス・・・  
お約束でげすね・・・分かるでありんす）

「言ったにゃ

どんなマタタビより芳醇で至高の一品にゃ」

「・・・

貴様・・・名はなんと言う」

「おいらはジョニー

それがどうかしたかにゃ？」

「ふふふ

はははは

は～っはっはっは」

## ジョニー放浪記（4）

---

「ああ  
悪いな  
久しぶりに笑った」

「ど、どういうことにゃ？」

「まさか昔・・・  
俺が捜し求めていたものを  
同じ夢を求めていたやつがいるとは  
思わなかったんでな・・・」



俺はフォックス（アビシニアン）



こいつは又八（バリニーズ）」  
よろしくな」

「ど、どういことでありんスか？  
おやb・・・Boss!!  
まさか手伝う気じゃないでげしょうね」

「そうだが？  
悪いか？」



「や  
おやb Bossがそう言うならあっしはどこまでも  
お供するでやんす」

「もしか手伝ってくれるのにかにゃ？  
本当にかにゃ？  
それは助かるにゃ～」

「良かったらふたりとも  
これ食べるにゃ」

ジョニーのもとに集まる  
2匹

「さっきからお腹ぺこぺこでやんす」

「な！なんじゃあ～  
おやb あ Bossあっしはこんなもの  
食べた事ないでやんす  
ジョニー!!!一生ついていくでゲス！」

「おい又八  
まったく貴様は」

「んがにゃはがまにゃものよんそうにゃぎやは」

「食いながらしゃべるな・・・」

「そんなに喜んでくれるなんてマリーも喜ぶにゃ～  
マリーの料理は天下一品にゃ」

「マリー？  
誰だそいつは」

「ん？給仕のマリーにゃ  
お屋敷で料理や色々やってるにゃ」

「主人がいるのか？」

「いるにゃ～」

レオンって言うにや  
すごっくどすけべにや」



ヒッキシン!!

「何よ。。その珍妙なくしゃみは・・・」

「申し訳ございませんお嬢さま  
きっと誰かがわたくしの噂をしたのでしょう」

「あああ  
麗しき淑女がわたくしの事を・・・」

「はいはい」



「（自主規制）とか（ビ°-）とかにや」

「そりゃ  
MAXなすけべでありんすな・・・」

「俺はノーコメントだ・・・」

## ジョニー放浪記（5）

---

「ところでジョニー  
俺は見つける事はできなかったが  
あてはあるのか？」

「あるにゃ  
お屋敷にある鏡に  
場所が映ったにゃ」

「お屋敷の鏡はちょっと  
変わった鏡が沢山あって  
DSのお嬢さまがいない間に  
こっそり見ちゃったにゃ」

「鏡だって！？  
そんなものに・・・  
もう少しお前に早く出会っていたら・・・」

「どうしたでやんす  
おやb Boss」

「もお昔の話した・・・」

「何かにゃ？  
フォックスもずきゅーんしてほしい  
子がいたのかにゃ？」

「ずきゅーん？  
まあ・・・そんなとこだ。。」

「えええ  
おやb Bossにもそんな子がいたでありんすか？」

「子って言えばそうかもしれんな  
名前はドロンジョだ・・・」

「ど、ドロンジョ  
ドロンジョってあのドロンジョでやんすか？」

「なにかにゃ？ドロンジョって  
そんなに有名なのかにゃ？」

「ハウエン地方一帯を取り仕切る  
女豹と言われてるでありんすよ」

「女豹・・  
いい響きにゃ～」

(やっぱりあの飼い主にして。。って感じでありんす)

「まさか  
おやb Bossとドロンジョが  
そんな関係だったなんて思わなかったでありんす」

「又八！」

「すいやせん。。おやb Boss・・」

「今日はもう遅いから  
寝るぞ！」

「フォックス、又八 おやすみにゃあ～」

(って！もお寝てるでやんす・・  
しかもめっちゃニヤケテルでありんす・・)

## ジョニー放浪記 (6)

---

翌朝

「おいジョニー  
いつまで寝てる！」

「にゃ～  
アンジェリ～ナちゃ～ん  
そこはダメだにゃ～」

.....

....

..

.

「おやb Boss  
ジョニー寝ぼけてるでありんス・・・」

「おい！」

「にゃ！  
(..三..)  
夢だったにゃ・・・」

「貴様がいないと場所が分からん」

「そうだったにゃあ～  
昨日は女豹で妄想しちゃって  
肝心なこと言うの忘れてたけどにゃ・・・」

(女豹で妄想ってどんだけでやんすか・・・)

「大きな1本杉があって立派な少し古びた屋敷って  
この辺にないかにゃ？」

！

顔を見合わせる二匹

「ま、まさか・・・」

「きっとそこでやんす  
おやb Boss」

「心当たりがあるのかにゃ」

「昨夜も言ったが  
ドロンジョの屋敷に違いない・・・  
そんな所にあるなんて・・・  
なんて偶然だ。。」

「ドロンジョは既に持ってた  
なんてことはないでありんすか？」

「それはないだろう  
あれほどふたりに探したんだからな・・・」

「にゃ～～～  
女豹に逢えるのかにゃ！  
おいらわくわくしてきたにゃ！」

ガン！

「うにゃ！Σ(・ω・ノ)ノ！」

壁に押しやられるジョニー

「やつを侮るな！  
CQCをマスターしてるからな」

「CQC？って何にゃ？」

「キャット・クォーターズ・コンバット  
略してCQCだ  
俺と彼女で編み出した  
牙と爪を使わず相手を制圧する技だ」

「にゃ～  
にゃんとも怖い技にゃ」

「大丈夫でやんすか？  
3人で・・・」

「それは問題ない

いざとなったら・・・」

「よし！  
行くぞ！ひとまず俺たちのアジトで準備だ」

## ジョニー放浪記 (7)

---

ぎい～  
ゆっくりと開く扉  
ここは少し古びた洋館

「イー(。ω。)>  
報告です！マダム！  
たったいまフォックスとおぼしきもの他2名を  
確認したと密偵から連絡がありました！」

「なんですって！  
なぜ今頃・・・  
至急各支部に通達  
全力をもってこれを阻止せよ！  
と  
いや待って・・・  
そのまま泳がせておいて  
目的が知りたいわ  
【はひふへほ】から連絡もないし・・・」

「イー(。ω。)>  
了解しました！マダム！  
では、失礼します！」

フォックス・・・

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ここからでやんすね  
おやb Boss！」

「ああ  
それにしても妙だ・・・静か過ぎる・・・」

「そうかにゃ～  
きっとおいらに惚れてるかもしれないにゃあ～」

(ジョニー・・・  
んなわけあるかっ！って突っ込みたい気分でありんス)

「ここからどれくらいにゃ？  
お屋敷まで」



「そうだな  
あと4日くらいといったところか」  
「にゃ～  
結構あるにゃ～」  
「ま・・・  
順調にいけば。。でやんすね  
おやb Boss」  
「ああ  
すんなり通してくればいいが・・・」



「ちっ  
フォックスの奴・・・  
今頃ノコノコときやがって」

「ああ兄弟  
この傷が疼くたびに奴を思い出す」

「おまえら！  
ここは手出し無用  
我ら兄弟の恐怖を刻んでくれるわ!!!」

## ジョニー放浪記（8）

---

「ですが少佐！  
マダムは泳がせておけとの  
命令ですが！」

「貴様  
俺たちに逆らう気か？」

「と、とんでもございません  
お二人に逆らう気など・・・」

「きっとマダムもお喜びになるはず！  
だまって俺たちに従えばよい！」

「イー(。ω。)>」

「いくか兄弟！」

「ああ  
今すぐほふってやるわ！」

急に現れる影・・・  
ひとつ・・・ふたつ  
徐々に増えていく

「にゃ～  
な、なんかいっぱいいるにゃ～」

「い、いつの間に  
こんなに沢山・・・  
どこから来たでありんスカ！」

その先頭に立つ2匹

「来たな  
おそらく貴様らが最初だと思っていた  
ヘル・ブラザーズ！」

「ひさしぶりだなあああ  
ふおおおっくす！」

「この傷が疼くたびに貴様を思い出す

あの2年前の夜を！」

「昔話をしに来たのか？  
さっさとかかって来い！  
俺たちは急いでるんでな」

(にゃ～  
かっこよすぎるにゃ～)

「！  
言うようになったなフォックス  
あの頃の俺たちと違う所を見せてやる！」

シャキン！

鋭利な刃物を取り出したような音がする

「まだそんな爪に頼るとは・・・」

「ほざけ！  
いくぞ！兄弟!!!」

「必殺覇猫陣風拳!!!」

周囲の空気がその兄弟に集まっていき  
そこだけ小型の竜巻が起きたような渦になる・・・  
轟音と共にその塊が3匹めがけ突進してくる！

(あれ？  
あっしはなしでやんすか？  
あんまりでありんす・・・)

## ジョニー放浪記（9）

---

おいらは見たにや

塊がまっすぐ、おいらたちに向かってきて

おいらは地面に張り付くように構えたんだにや

なぜならそれが精一杯だったからにや。。

でもフォックスは違ったにや

その風を利用してまっすぐ突っ込んでいったにや

そして激しい閃光が見えたにや。。

そしてそれは一瞬で決まったにや

懐に飛び込み

爪をかわすと

あの兄弟が地面に叩きつけられたんだにや

フォックスにひれ伏すように・・・

「わあああ

少佐たちがやられたああ

総員退却う!!!」

「イー(。・ω・)>」

蜘蛛の子を散らすように

一目散に手下どもは去って行った・・・

倒れた相手に駆け寄るジョニーと又八

「息はしてるにや・・・」

「当然だ」

「今のがCQCかにや？」

「ああ

ああやってイノシシみたいに突っ込んでくる相手は

処理が楽だ」

「凄いにや」

「ジョニー今のが見えたのか？」

「見えたにやあ～」

「あっしは気付いたら  
もおそいつらが倒れてたでやんす・・・」

「そうか・・・」

（あれが見えるとはジョニー・・・  
かなりの素質がありそうだな）

（（ちっ！  
こうもあっさり倒されるとは  
まあいい次で・・・））

「おやb Boss  
怪我はないでありんスカ？」

「ああ  
まったくな。先に進もうか」

## ジョニー放浪記 (10)

---

「イー(。ω。)>

ご報告です

ゴニヨゴニヨ」

「なんだって？

ヘル・ブラザーズが？」

「あたいを差し置いて

マダムに気に入られようと

かっこつけるからこうなるのさ」

「まったくばかなふたりだよ

あたいが見せてやるわ！」

「おまえたち！

この世で一番美しいのは誰だい？」

「イー(。ω。)>

マダムであります！」

「この世でもっとも

可憐なのは誰だぁあい？」

「イー(。ω。)>

それはマドモアゼルであります！」

「おまえたちいくよ！」

「イー(。ω。)>」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

昨夜

「ああ

分かってるジョニーたちが来たら手筈通りに」

「2年前の借りがあるからな」

「さすがヘル・ブラザーズ  
話分かる」

「だがいいのか？兄弟」

「なァに構やしない  
手柄を立てればマダムも分かってくださる」

「しかし【はひふへほ】  
貴様はいったい何者だ？」

「それをお前らが知ったところで  
理解できないだろうな」

「まァ俺たちは復讐さえできれば  
それでいいではないか兄弟！」

「それもそうだな・・・  
貴重な情報感謝する」

【はひふへほ】・・・  
やつの目的は  
そしてマドモアゼルと名乗る新たな敵！？

## ジョニー放浪記 (11)

---

「にゃあ～  
疲れたにゃあ～  
お腹減ったし・・・」

「あっしも減ったでやんすう～  
おやb あ Boss飯にしませんか？」

「まだだ  
ここは見通しが悪いし  
待ち伏せには好都合だ  
もお少しいけば・・・」

「しっ！静かに」

ガサ

ガサ

「あ～っはっはっは  
久しぶりだねえええ  
フォックスう」

「にゃ！にゃ～～～～  
なんだか凄い格好したお姉たまにゃあ～～」

「貴様！ハンナ!!」

「イー(。ω。)>  
愚弄共！呼び捨てにしおって！  
マドモアゼル・ハンナさまですぞ！」

「イー(。ω。)>」





ハンナ（キムリック）

「おまえたち！  
この世で一番美しいのは誰だい？」

「イー(。ω。)>  
マダムであります！」

「この世でもっとも  
可憐なのは誰だぁあい？」

「イー(。ω。)>  
それはマドモアゼルであります！」

「おやb あ Boss  
なんか・・強烈なのが出てきたでありんす・・」

「あ、ああ・・  
いつもああだ・・」

「あたいの心を踏みにじっておいて  
よくも帰ってこれたねええ  
それともマダムが恋しくなったのかぁあい？」

「貴様！だまれ！」

「まあまあフォックス  
ここはおいらが相手だにゃ～」

（なんかジョニーのやつ  
妙にハイテンションでやんす・・）

ついにジョニーが!!!  
その戦闘能力はいかほどか!!!

## ジョニー放浪記 (12)

---

ハンナに近づくジョニー

その前に衛兵2匹

(1:1が望みかい中々やるねえ)

「お前たち下がっていいよ！」

「イー(。ω。)>」

対峙する2匹

すると深々と頭を下げ

一礼するジョニー・・・

「ごきげんよう

マドモアゼル・ハンナ

初めまして

ジョニー・ランドールでございます」

(中々の騎士道じゃないかい)

「@@ジョニーが・・・

おかしいでやんす・・・」

「・・・・」←フォックス

「この右目はあなたを

そしてこの左目はあなたの心を・・・

見ているのでございます^-^-」

(え？ずきゅーん☆ー☆)

「ジョ、ジョニー？

あんた・・・

あたいを見てくれるのかああい？」

「当然でございます

この世の可憐さを全てお持ちのあなたに

誰が敵いましょう」

「ああああ

ジョニーいいい」

「おまえたち！  
ジョニーさまがお通りよ！  
さっさと道をあけなさい！」

「イー(。ω。)>」

「ああん  
ジョニー良かったらこれも持って行ってええ」

「よろしいのですが？  
マドモアゼル・・・  
こんなに頂いても？」

「いいのよおお  
あたいからの・・・  
き・も・ち」

「おやb あ Boss  
どうなってるでやんすか？」

「知らん！」

( (なんなんだ  
あいつは・・・  
これではまったく意味がない  
くそっ！せっかくの計画が!!) )

ジョニー。。あんたってやつあ  
おばか執事が完全憑依!?

## ジョニー放浪記（13）

---

結局そこで食べる事に・・・

一面に広げられた料理に  
ジョニーたちは舌鼓

「にゃあ～  
ハンナお姉たまあ～」

「おやb あ Boss  
なんなんでやんすかありゃ・・・」

「まったくだ・・・  
だがジョニーにはいつも驚かされる」

「そうでありんすねえ  
結局戦わなくて済んだでやんす」

「はい あああんしてえええ」

「う、うまいにゃあ～  
凄くおいしいにゃあ～」

「おいハンナ」

「あ？  
なにさ！あたいは今ジョニーとお食事中なんだから」

「怖いでやんす」ボリ

「ドロンジョはどうしてる？」

「はん！  
今頃になって何言ってるのさ！  
あんだけのことをマダムにしておいt・・・  
いや・・・今のは聞かなかったことにしておくれ・・・  
あたいが怒られちゃう」

「そうか、悪かったな・・・」

「そう言うあんたは

なんの目的なのさ！」

「話していいか？ジョニー」

「いいにゃ～」

「その前にそこの二人を遠ざけてくれ」

「ミチル！サンボ！  
少し離れて頂戴」

「イー(。ω。)>」

衛兵二人を遠ざける  
かくかくシカジカ・・・

ゴニョゴニョ

「そうだったのかい・・・  
だがいいかい  
フォックス！  
それ相応の覚悟でここまで来たんだろうねえ」

「ああ  
きっかけはどうあれ・・・  
いつか償いたかったことだ  
遅くなってしまったが・・・」

「ああそうかいそうかい  
あんたっていつもそうだよ  
遅いんだよまったく」

「すまんハンナ・・・」

「せっかくの料理がまずくならああ  
これ食べたらさっさとおゆき！  
あたいの気分が変わらないうちにね！」

「ああ」

「にゃんだか色々あったんだにゃ～」

「そうでやんすねえ」

ちょっとだけ触れたフォックスの過去  
にしてもジョニーおまえさん。。  
いつものに戻ってるじゃないか

## ジョニー放浪記 (14)

---

「じゃあ俺たちはこれで  
世話になったな」

「お待ち！  
どうせならあたいのエリアまで  
送っていくわ・・・」

「どういうことだ？」

「にゃ～お姉たまともうちょっと  
一緒にいられるのかにゃ～  
うれすういいにゃ～」

「か、勘違いするんじゃないよ  
フォックス！  
ジョニーのためにしてるんだからねっ！」

「ツンデレ？でやんすか・・・」ホリ

「ただそのままの格好だと  
あたいが怒られちゃうから  
これを着てもらおうけどねっ(-\_☆)」

「お前たち  
予備の衣装をもっておいで」

「イー(。ω。)>」

がサゴリ

「こ、これを俺が着るのか！？」

「あら嫌なのかい？  
あたいはどっちでもいいけどねえ  
1日近くは安全に行けると思ったんだがねえ」

「おやb あBossここはマドモアゼルに甘えやせんか？」

「くっ・・・仕方ない」

「にゃ～中々かっこいいにゃ～」

「って！もお着てるでありんす・・・  
じゃああっしも・・・」

ぬぎぬぎ

「・・・・・・・・」←フォックス

「おやb あ Boss  
似合ってるでやんすよ(´艸`)」

「うるさい！又八！」

「申し訳ねっす・・・ジョボッ」

ハンナー味に扮して館へと近付く  
ジョニーたち！一体どんな姿なんだろうね(´艸`)  
想像するのも面白いかも！



## ジョニー放浪記 (15)

---

(ちっ！

ハンナめ！いらぬ事をしやがって  
直接話しをしておくべきだった

その必要もないと思ったのが俺のミスか・・・  
ヘル・ブラザーズが倒されたら自然と動くとは思っていたが・・・

ジョニーによって心を揺らされたのか？  
嫌・・・それもあるがフォックスへの思いも  
強かった・・・という訳か。。失態だ・・・)

それからそれから

「あたいができるのはここまでだよ  
ここから先は【はひふへほ】のエリアだからね  
気をつけなよ」

「その【はひふへほ】って誰にゃ？」

「ああんジョニーい  
フォックス・・・  
あんたが去ってから急に現れ  
今はあたいたちより最大のエリアを任されてるんだよ  
かなり力をつけてるって噂さ」

「ただ誰もその姿を見てないらしいのさ  
いつもフードで顔を覆ってるって話でね  
フォックス！気をつけな  
あいつは相当の手練らしいからね」

「ああ気をつけておこう」

「ジョニーも気をつけるんだよお」

「分かったにゃあ～」

「あ・・・またあっしだけ・・・」ボリ

3匹を見送るハンナ

その目からは一筋の涙が頬を伝っていた

## ジョニー放浪記 (16)

---

2年前

ここはハウエン地方のとある場所

「フォックス  
ここがそうかあああい？」

「ああハンナ  
情報によればヘル・ブラザーズが  
根城にしてるらしい」

「わたしもいくよ  
CQCはまだ未完成だし・・・」

「いやドロンジョ  
ここは俺一人で十分だ」

「そうか  
気をつけてねフォックス」

「ああ分かってる」

単独小屋に入るフォックス・・・

「ん？何も・・・ない？」

「ふははは  
まんまと罠にかかったな」

！

後ろを振り返るフォックス

「ああ兄弟  
こうもあっさり釣られるとはなあ」

「くっ！」

「貴様がフォックスだな  
最近我ら兄弟の縄張りを荒らしていたのは  
だが、それも今日までだ

ここで終わりにしてやるわ！  
ふははは」

「まったく何が宝珠だ  
そんなものがあれば我れら兄弟  
もっと力をつけておるわ！」

「おとぎ話にしか存在しないものを  
本気で探してるばかな3人がいると  
聞いていたがほんとにいるとはなあああ」

「うるさい！黙れ!!!  
それは俺たちの・・・  
ドロンジョのために！・・・  
くっ。。」

「さっさと来い！  
ここでお前たち兄弟を倒す！」

「聞いたか？兄弟  
我らを倒すらしいぞ」

「ああ、まったくだ  
我らに適うはずなからう」

「御託はいい！とっとと来い！」

「いくぞおお！フォックス！」

機敏な動きでフォックスを翻弄する  
ヘル・ブラザーズ・・・  
一瞬二匹の動きが一匹に重なった

「な！」

次の瞬間フォックスの死角から爪を立てて  
飛び込んでくる弟のグレイ  
そのまま突っ込む兄のラスカル

果たしてフォックスは勝てるのか!!!

## ジョニー放浪記 (17)

---

柱 | w · ) ジー

(やっぱりあたいじゃなく・・・  
ドロンジョを。。)

数分前

「ドロンジョ」

「何？ハンナ」

「あたいちょっとトイレ・・・」

「一緒に行く？」

「大丈夫さ

子供じゃないんだから」

「そお

くれぐれも用心するんだよ」

「分かってるよ」

.....

(やっぱりフォックスだけじゃ・・・  
嫌な予感する)

後ろから襲い来るもお一人に気付いてない！？

「危ない！フォックス！」

ガシン!!!!

「きゃっ」

グレイの攻撃を身を挺して阻止したハンナ

「ハンナ！」

その爪は肩に刺さりえぐった  
肩口からは血が・・・

「くっ！」

「ちっ！」

余計な事をする女め！」

「もう一度だ！兄弟!!」

「ゆくぞ！フォックス!!」

再びモーションに入る兄弟・・

（そうか・・

そういうことかハンナのおかげで謎が解けた

一直線にこちらに飛び前方に注意を引き

前の奴が後ろ足で後ろの奴を俺の後方へ飛ばし

死角から攻撃か・・

その前に叩けば！)

次の瞬間

片目を負傷した兄のラスカルが倒れていた

「ぐあああ

目があああ目がああああ」

「兄弟！？

おのれえええ！ふおおおつくす!!!」

「くそおお覚えてろっおお

ば～かば～か あほお～あ～ん」

「・・・・・・」←フォックス

ヘル・ブラザーズの捨て台詞・・

子供じゃないか！

## ジョニー放浪記 (18)

---

「大丈夫か？ハンナ」

「ふん！どうってことないよ！

ただのカスリ傷さね！

うっ！」

「ほら肩に掴まれ

おかげで助かった・・・すまん」

「いいんだよ。あたいが勝手にしたことだし

気にするんじゃないよ」

2匹が逃げて行くのを確認した

ドロングョが小屋にやってきた

「フォックス！

あれ？なんでハンナが？」

かくかくしかじか

ゴ`ニヨゴ`ニヨ

「そうだったんだね・・・

しかしハンナ無茶するよ」

「・・・」←ハンナ

(どうせ・・・

あたいは。。

でもフォックスを助けられた・・・

今はそれだけで満足さね)

ちっ

昔のことを思い出しちゃったじゃないかい・・・

肩口を押さえ涙を拭うハンナ

その後CQCを完成させあたいは

あんたたちから去った。。

まだ宝珠は見つからなかったけどね・・・

でも、突然のマダムからの連絡で  
キャット☆ザ☆キャットの幹部になった  
なぜだかあたいはそれでいいって思ったんだ

あたいを慕ってくれる子分たちもかわいかったし  
だけどマダムは変わっていった  
フォックス・・・あんたが去ったから。。

まるであんたを近づけさせないように  
組織を大きくしてった・・・  
だから少しでも力になればと思ったけど  
あたいには救うことが出来なかった。。  
マダムを支えたかったけど。。

彼女が望むならとヘル・ブラザーズとも手を組んだ・・・  
マダムを・・・  
ドロンジョを救えるのはあんたたちだけだよ

今さらそんなこと言えるあたいじゃないけど・・・  
でも・・・今回の命令は違ったんだ  
それに賭けてみたくなった

ほんとはこの場であんたに倒されても良かったんだ・・・  
たぶんジョニーはそれに気付いたんじゃないかって  
思ったんだよ  
変わった奴だ。。ジョニー  
頼んだよフォックス・・・ジョニー。。

ん？  
あと一人だれだっけ？  
又兵衛か？  
うん、たぶんそうだ(o^-')b

あっ！又八かわいそう・・・  
ジョニーはそんな奴なのか！いい奴なのか！  
↑たぶん違うな（ホリ



## ジョニー放浪記（19）

---

「ついに来たでござるな」

「わらわも待ちくたびれたでおじゃる」

「わいはもお我慢できひん  
あいつらひいひい言わしたるわ！」



ござる言葉の服部（はっとり）



まる言葉の唄子（うたこ）



関西弁のうる

【はひふへほ】直属の三人衆

「屋敷に入るまでに  
必ず仕留めろとお館様に言われてるで  
ござるからな」

「わらわはいつでもいいえ  
暴れられるならそれでいいでおじゃる  
久しぶりに血が騒ぐわいなあ」

「そりゃわいだって同じや  
ぎったぎたにしたいわ  
んでな  
こうせえへんか？」

ひとりづつ別れて倒すねん  
そんで、一番最初に勝ったほうが  
褒美を総取りや  
ゲームみたいやろ  
どうや？服部はん唄子はん」

「わらわはどっちでもいいでおじゃる」

「うる殿。。拙者はそれはどうかと思うが・・・」  
「なんや服部はん、こわなったんか？」

「ばかを言うなでござる  
ただ確実に仕留めるならそのほうが」  
「ああ  
分かった分かった服部はんは臆病もんやっと  
MEME\_♂（・・・）」

「分かったでござる！  
なら拙者はどうもうさんくさい  
又八を貰うでござる！」

「お！服部はんやりおんなあ  
服部はんには似合いや  
なんや言葉使いも近い気いするしな」

「唄子はんはどないすん？  
フォックスいっとく？」

「わらわはやっぱりジョニーがいいでおじゃる  
あのオッドアイをコレクションにしたいわいなああ」

「でた！唄子はんのマニアっぷり  
ほなわいがフォックスでええな？  
久々骨があるやつでわくわくするわ」

「ひとつ質問でござる」  
「なんや？ゆうてみい」  
「それでどうバラけさすでござるか？」  
「わらわも気になるでおじゃる」

「ああ  
なんやそんなことかいな  
わいに、い〜い考えがあるさかい任しといてんか  
ちょう近くに・・・」

ゴ`ニヨゴ`ニヨ

「御意！」  
「分かったでおじゃる」

うわっ！  
強烈なのがでてきたね!!

## ジョニー放浪記 (20)

---

「もおエリアに入ってどれくらいでやんすかねえ」

「ほんとだにゃ～  
誰も来ないにゃ～」

「二人とも気を抜くな  
この廃墟を抜けたらもおすぐだ」

「あああ  
女豹・・・どんなのだろうにゃあ～」

「・・・」←フォックス

「またかでやんす・・・  
つとにジョニーは困ったもんでありんスなあ」

「にゃ！  
又八！  
女豹は男の浪漫！  
女豹を見たら尻尾を振って  
三回周ってにゃ～女豹ちゃああん  
って言うんだってレオンに教えられたにゃ！」

「それは。。どうかと思うでやんすよ・・・  
ねえ おやb あ Boss」

「くだらん！」

「にゃ・・・  
にゃんだこの匂い・・・  
いい香りがするにゃあ～ククン」

「何か感じるか？又八」

「や・・・あっしには何も。。」

！

「にゃにゃ！  
あれはおいらがいつも愛読してる  
週刊にゃんこボーイにゃ！

あああ  
待つにゃ〜」

不自然な風が吹き  
それは飛んでいく  
引き寄せられるように釣られるジョニー

「おい！ジョニー  
離れるな！」

「大丈夫にゃ  
すぐ戻ってくにゃ〜」

「ったく・・・  
ん？  
さっき何か動かなかったか？  
又八ここにいる！」

「ええ  
あっしも一緒に」

「ダメだ  
ジョニーが帰ってくるまでだ  
いいか！動くなよ！ちょっと見てくるだけだ」

バラバラにされてしまった3匹

あかん・・・それは罨や！  
にしても週刊にゃんこボーイ・・・どんな内容だろうね（笑）

## ジョニー放浪記 (21)

---

「ってゆう算段や」

「御意！」

「分かったでおじゃる」

あほやあいつら

ほんまにひっかかりおったで

もおひとつプランあったんやけど・・・

まあ結果オーライやな

まんまと罠にかかったジョニーたち。。

「にゃにゃ～

待つにゃ～にゃんこボーイちゃ～ん」

ボイン

「うにゃ@@@

イタタ・・・

う！うにゃ～こりゃ凄い和服の似合う

お姉さんにゃ！」

「わらわにぶつかっておいて

なんじゃその態度は！」

「わわ

ごめんによあまりの美しさに

目を奪われてしまったにゃ！

おいらはジョニーぶつかってごめんにゃ」

「知ってるでおじゃる」

「えええ

おいらそんなに有名なのかにゃ～

ううれすいいにゃ～」

「ばか言うなでおじゃる

わらわのターゲットでおじゃるから

当然でおじゃる」

「！  
にゃ～さては【ぱびぷぺぽ】の手下かにゃ！」

「・・・  
どうしてそんなわざとらしい間違いをするでおじゃる  
許せないでおじゃる！  
わらわは唄子  
その目をわらわのコレクションにしてやるわいな！」

「にゃ～  
ここ（↓ヲミ なら良かったのにゃ！」←ヲミ!!!

「どこまでも人をばかにしておって  
勝負でおじゃるジョニー！」

「受けて立つにゃ！」

その頃・・・又八に迫る服部

どうなるジョニー！？  
逃げろ又八い～

## ジョニー放浪記 (22)

---

ガサ！

「ん？  
おやびん？」

！

「あんたは誰でやんすか！？  
もしか【かきくけこ】の手下でありんすか！」  
↑オI功!!!

「【はひふへほ】でござる！  
まったく・・・  
どこかで見たやりとりをまたするなでござる・・・」

「なんのことでやんすか？」

「まあいいでござる！  
拙者は服部  
貴殿を又八殿とお見受けいたす  
いざ尋常に勝負！」

「やっとなっしにも。。  
見せ場が来たでありんす・・・  
長かった！  
長かったでやんすう～」

「何を言ってるでござるか  
のんきなものでござる！  
いざっ！参る!!!」

ジャキーン！と爪を出す服部

「こっちこそ  
行くでありんす！」

（ちっ  
まったくこいつらと来たら・・・  
少し自由にさせすぎたか  
まあよい  
どのみちここであいつらに深手を負わせておけば



あとあと楽になるからな??)

一瞬で距離を詰める2匹

壮絶な死闘を繰り広げようとした

その次の瞬間！！

又八が服部の視界から消える

「な、なに！（・\_・ 三・\_・）

どこに消えたでござるか！

！

ありえないでござる」

ぐるっと見渡してもどこにも見当たらない又八の姿

「急に消えるなんて・・・

やはり奴は只者ではなかったでござるな・・・

だがしかし倒したのには違いないでござるな！

これでお館さまからの褒美は拙者が独り占めでござる

ははははっ」

服部の後方には古井戸の穴が開いていた・・・

あ～あ

又八・・・残念すぎるぞ。。

大丈夫かな？

## ジョニー放浪記 (23)

---

「おかしいな  
俺の見間違いだったようだ  
戻るとするか・・・」

「ちょうまってええな  
せっかくバラけさせたのに  
そない早う合流されたら かなわんわ」

「誰だ！」

「はじめまして☆  
フォックスはん  
わいはうるいいます。よろしゅう」

「【はひふへほ】の手下か！」  
↑よく言えた！エライぞ！さすがフォックス

「せや  
ずっと待ったんやで  
ハンナはんがいらんことするさかい  
手出しでけへんかったわ」

「知ってて待っていたのか？」

「まあそれもあるんやけど  
ハンナはんの男気ゆうもんを尊重したなつたさかい  
厳密にゆえば、女気ゆうんかなあ」

「なかなかのもんだ  
で？俺と勝負したいと？」

「せやせや  
それが目的なんやった。  
ただ強いやつと戦いたいねん  
目的もった強い奴と！  
そいつらひいひい言わしたいねん！  
いくで！フォックスはん！」

「いいだろう  
来い！うる！」

なんか危ない奴だね！  
勝てるのかフォックス！

## ジョニー放浪記（24）

---

ガシン！

ザザ！！

うるの爪をかわすフォックス

「なかなかやりおんなあ  
さすがや  
わいゾクゾクしてきたわ！」

「ほなこれはどうや？  
いくで！」

「はあああああああ」

気合と共にうるの足の筋肉が急激に  
膨らむ  
衝撃がうるの後方へ飛んで行く  
と同時にフォックス目がけ  
矢のようなスピードで爪をたてる

ガシ！

「くっ！」

その爪がフォックスをかすった

「あら  
これ避けるんかいな  
フォックスはん・・あんたで二人目や  
さすがやな」

「どんどんいくでえ～」

縦横無尽に駆け巡りフォックスを追い詰めていく

ザク！

その爪がとうとう獲物を捕らえた！  
砂埃が舞い散る

「はははは  
やったで！仕留めたった!!  
なんちゅう気持ちええんや  
これや！この感触や  
たまらんで！」

えええ  
フォックスがあああ

## ジョニー放浪記 (25)

---

砂煙が次第に晴れて行く・・・

「うそやろ・・・」

その爪に捕らえていたものは  
フォックスではなかった

「しもたあああ  
くっそお  
抜けへん！」

「丸太と俺の区別もできなかったんだな  
その異常な筋肉がお前の敗因だ」

フォックスは咄嗟に近くの丸太と入れ替わり  
砂埃を巻き上げ  
視界をさえぎっていた  
避けながらその丸太まで追い込んでいたのだ

ガシ！

首筋に強烈な一撃  
うるはそのまま倒れこんだ

「く・・・  
ま、まさかこんな手でやられると・・・は・・・  
お、思えへんかった・・・わ。。  
読者もがっかりやわ・・・ホリ」←バラサ！

「周囲にまで気を配り  
地の利を生かせないようでは  
到底俺には勝てんな」

「どのみち無理だろうがな」

「くっそお・・・  
悔しいわ・・・わい。。  
こ、今度やったら・・・絶対・・・い・・・  
負けへんか・・・らな・・・  
きよ、今日はこの辺に。。しといた。。る・・・わ」

「ああ  
いつでも相手になってやる」

ガクッ

そのまま気を失う うる  
その表情は穏やかだった

「っと  
又八とジョニーが心配だ  
急がないと」

その場を足早にフォックスは去っていった

フォックス・・・又八は。。もお・・・  
あああ又八・・・  
そしてジョニーの勝負の行方は！

## ジョニー放浪記 (26)

---

「なかなかの動きだわいな  
遊びはここまででおじやる」

(フォックスの動きは  
もおちよっと速かったにや・・  
たしか・・)

2匹が一気に距離を縮める  
そしてジョニーが唄子の懐に飛び込んだ

「にやはは  
これにや～んだ」

「そ、それは  
わらわの帯？」

次の瞬間ジョニーは  
勢いよく帯をひっぱる

「ああああれええええええ」

くるくると凄い勢いで回る唄子

「目がまわるでおじやるうううう」

そのまま目を回し気を失ってしまった唄子

「イッ  
うまくいったにや」

ジ-

そのまま唄子を眺めるジョニー

「にや  
教育上よくにやいから  
この辺にしとくかにや」

「みんなのところに戻るにや～」



「あれ？フォックス  
又八はどこにや？」

「ん？一緒じゃなかったのか？」

「おいら唄子とかいうやつと  
戦ってたにや」

「お前も？  
ってことは又八もか？」

「じゃ～フォックスもかにや  
そのキズ大丈夫かにや？」

「ん？ああ  
かすり傷だ なぁに、たいした事ない」

「・・・にしても又八は？」

「どこいったんだろうにや～  
どこかに連れ去られたとかかにや？」

「あり得るな・・・  
よし！先を急ごう」

「分かったにや！  
又八待ってろにや！  
今助けにいくにや！」

あああ  
行っちゃった・・・

## ジョニー放浪記 (27)

---

「なんで！？  
なんでなの？フォックス」

「すまん・・・ドロンジョ  
俺は・・・  
あんなに探したのに  
これだけ探したのに・・・結局見つける事ができなかった」

「最初はただお前といるだけで  
楽しかった。。こうやって旅をするだけで  
だが・・・  
次第に宝珠だけがそれだけが目的に・・・

目標になってしまった・・・  
そのためだけにCQCも完成させた  
誰も傷つけず目標を制圧するために・・・」

「だから俺は俺なりに探したいんだ  
お前はお前の幸せを考えてくれ・・・  
俺にはその資格がありそうにない」

「そお・・・  
わたしより宝珠マダム。。なのね・・・」

「分かった・・・  
フォックスが選んだんだもの。。  
でも・・・いつか。。  
や。。なんでもない・・・」

「すまんな。。ドロンジョ・・・」

もおすぐだドロンジョ。。  
あの時はああ言うしかなかった  
けどもうすぐ答えが見つかる

だが・・・  
お前に何があったんだ  
人質をとるようなことはしなかったはずなのに・・・  
又八！  
待ってる今行くからな

そうだったのかフォックス・・・  
そんなことがあったんだね  
でも又八は。。

## ジョニー放浪記 (28)

---

「あれ？  
まだ誰もいないでござるな  
ということは、やはり拙者が一番乗りでござるか  
お館さまは帰られたでござろうか  
報告にいくとするでござる」

コンコン

「イー(。ω。)>  
失礼しm  
はっ！  
え？」

(ちっ  
見られたか・・・仕方ない。。)

「あああああ  
ぎゃあああああああああ」

「あれがそうなんだにゃ」

「ああ  
ジョニー」

「ずいぶん大きなお屋敷にゃ」

「いくぞっ！」

「にゃ  
イー(。ω。)>」

「・・・」←フォックス

コンコン

「イー(。ω。)>  
失礼します！  
マダム!!奴らが来ました！」

「そう・・・  
来たのね。  
ここに通して」

「お言葉ですがマダム  
あまりにも危険では！」

「口答えする気？」

「いえ！  
すぐにつ！  
イー(。ω。)>」

「さあ  
目的を聞かせてもらおうわよフォックス・・・」

ついに対面!?

## ジョニー放浪記 (29)

---

扉の前に並ぶ衛兵たち  
その前に1匹だけ立っている

「ん？  
どうやらこいつらは戦う意思はないようだな」  
「なんで分かるにゃ？」  
「殺気を感じないからだ」  
「そうなのかにゃ」  
「ああ」  
「イー(。ω。)>  
我が名は執事アレン  
マダムがお待ちだ  
案内する」  
「にゃ  
執事！いいにゃあ  
おいらにも欲しいにゃ」ホリ  
「分かった・・・」  
「着いて行くのかにゃ？  
罨かもしれないにゃ」

「だとしてもだ  
どのみち行かないといけないからな  
又八が人質では  
どうしようもない」

「そうだにゃ・・・  
待ってるにゃ！又八!!!  
今いくにゃ！女豹ちゃああん」

「・・・」

コソコソ

「イー(。ω。)>  
お連れしましたマダム」

「あなたたちは下がりなさい」  
「イー(。ω。)>」

「久しぶりねフォックス・・・」

「ああ・・・」

「この人が女豹なのかにゃ・・・  
綺麗だにゃあ～」



ドロンジョ（トンキニーズ）

「又八をどうした？」  
「え？」  
あ！あああ  
アイツね・・・」

「無事なのか？」  
「無事よ。。」

「そうか・・・」

「で・・・フォックス。。  
今さらなんの用なの？  
まさかまだ宝珠なんか探してるんじゃないでしょうね？」

「そのことなんだが・・・  
今さらなんだが  
どうやらここにあるらしいんだ

俺たちが探しても見つからなかったものが  
ここにあるって話なんだ！

俺はお前と分かれた後  
ジョウト地方を探した  
ジョウト地方もくまなく探した  
だが。。やはりなかった  
諦めた頃、又八と出会った  
あいつは俺のことを親分なんて呼んで  
付いて来てくれたんだ  
ほどなくしてジョニーにあった  
ジョニーの飼い主は不思議な鏡を持ってるって話で

ここにあるって言うんだ

ジョニーには。。

悪いが・・

俺はお前に・・

ドロンジョ・・

どうしてもお前に宝珠マダムを渡したかったんだ。。

今さら許してくれとは言わない・・

それがあると分かった。。実在するって分かったとき

形としてけじめだけはつけたかったんだ

宝珠をお前に渡すことで・・」

「ジョニー・・すまん

これが本当のことなんだ。。」

「おいらはそのことだったら大丈夫にや

フォックスに協力するにや～」

「ドロンジョ・・

又八を解放して

そして・・

もう一度だけ一緒に探してくれないか？」

「・・・・」

果たしてドロンジョが出した答えとは

そして又八の安否は!!



## ジョニー放浪記 (30)

---

「そう・・  
そうだったんだね。。

宝珠をわたしにか・・  
それがあなたの答え。。

そうとも知らずわたしは・・  
わたしはとんでもないやつと手を組んでしまった。。  
確かに宝珠はここにある・・」

(なにい！)

「えええ凄いにゃあ～  
あの鏡の力は本当だったにゃあ～」

「ほんとうなのかドロジョー！」

「本当だよ  
フォックス・・あなたと別れた後  
わたしはキャット☆ザ☆キャットを設立

目的は。。  
あなたと一緒に・・  
わたしなりにもお一度探したかった

そんな矢先あいつが現れたの・・  
【はひふへほ】が・・  
最初は親身になって探してくれた  
それからしばらくして

ふと  
あなたと初めてあった場所に行ってみたくなった  
何かに導かれるように・・

そのとき偶然木箱を見つけてね  
その中にあった・・  
これが宝珠。。これがわたしたちが探してたもの

やっと・・長年の。。フォックスの答えを見つけたって  
だからコレさえ持っていれば  
またあなたと巡り逢えるんじゃないかと思った

けどその時にはもお【はひふへほ】の力は強大になり  
わたしの力がおよばなくなった

ハンナには悪いことをした。。

それと・・・

あなたが言う又八は。。

ここには・・・」

(だからか・・・

お前か・・・お前だったんだな。。

苦勞して見つけた時に空だった理由が分かった)

(時は満ちた

後は奪うだけ・・・)

がチャ

突然ドアが開く

そこには・・・

はぁ～い

一旦CMで～す (坂田銀時CV: 杉田智和で)

## ジョニー放浪記 (31)

---

がチャ

突然ドアが開く

そこには・・・

「おやびん！」

「又八！無事だったんだな！」

「え？」

その言葉を聞き固まるドロンジョ

「にゃ～又八い～」

「この通りぴんぴんでありんすよ」

ドロンジョを見る又八

「この人がドロンジョでやんすかあ

綺麗でやんすなあ」

「でもおやびん

あっしを置いてくなんてひどいでありんすう」

「てっきり俺はドロンジョに」

「ああ

いいでやんす全然きにしてないでやんすから

その代り」

と言いながら

フォックスに近付く又八

「その代わり

おやびんにはここで眠ってもらうでやんすがね！」

「な、なに!？」

「にゃにゃ！」

次の瞬間又八の爪がフォックスに

向かってすばやい速さで届こうとしていた

「くっ！」

だが届いたのはドロンジョにだった・・・

「ドロンジョ！」  
「逃げて！フォックス！  
こいつが！  
こいつが【はひふへほ】よ！」

「ちっ邪魔しやがって  
順番が逆になったか・・・」

「何い！  
又八！貴様ああ」  
「うにゃ～嘘にゃ！」

「ばらすなよ  
ドロンジョ  
あとちょっとだったのに」

「あう」

傷口にさらに爪を深く立てる

「まあいい  
バレてしまったな  
だが俺は又八でも【はひふへほ】でもない  
レイヴンだ  
漆黒の闇から生まれた猫・・・  
とでも言うておこうか」

「レイヴン？」

「にゃ～」

「さてと  
ドロンジョ  
宝珠がまさかここにあるとは思わなかったが・・・  
案内してもらおうか？」

又八が。。あの又八が・・・  
いやああああ

## ジョニー放浪記 (32)

---

「さてと  
ドロンジョ  
宝珠がまさかここにあるとは思わなかったが・・・  
案内してもらおうか？」

「おっと・・・  
お前たちはそこを動くなよ、この女がどうなってもいいというなら  
話は別だがな  
お前も無駄な抵抗はしないことだな  
くくく」

「待て！  
又八!!!  
どういうことだ!!!」

「どういうことにゃ！」

「レイヴンだ！  
しょーがない  
読者のためにも説明しておくか  
お前らの冥土の土産としてもな  
くくくっ」

「どうやってここまで来たかが先だな  
フォックス・・・  
お前と別れた所に古井戸があったんだが、そこはこの古井戸と繋がってるのさ  
そこに俺の部下が来たわけだ。あいつらには期待してたんだがな  
どうもやつらの変な癖が出てしまったらしい」

「くそっ！」

はき捨てるように言うフォックス

「後はここで【はひふへほ】として  
待てばいい  
だがドロンジョの様子が変だったから、もう少し探りを入れたかったって話だ  
そして、宝珠のことだが・・・俺はある文献を目にしてな  
いわゆるお前らも知ってる話さ。もっとも俺が見たのは  
さらに詳しくあったがな」

「そこでだ  
俺はこの地方を良く知らない

ならばこの辺を取り仕切るこいつの手下になり、さらに幹部になれば話は早いだろ？  
情報も入りやすくなるしな  
だがCQCはあの当時の俺では勝てなかった  
そこで実践で鍛えたんだよ。コツはすぐに掴んだしな  
おかげで幹部になれた  
そしてエリアを広げて行った  
宝珠に辿り着くのにかなりの月日が  
流れたわけだが・・・  
それは今さらどうでもいいな  
さっきの話で  
こいつがあっさり見つけやがったからな」

一旦切ります

## ジョニー放浪記 (33)

---

「そこでだ  
俺はこの地方を良く知らない  
ならばこの辺を取り仕切るこいつの手下になり、さらに幹部になれば話は早いだろ？  
情報も入りやすくなるしな  
だがCQCはあの当時の俺では勝てなかった  
そこで実践で鍛えたんだよ。コツはすぐに掴んだしな

おかげで幹部になれた  
そしてエリアを広げて行った  
宝珠に辿り着くのにかなりの月日が  
流れたわけだが・・・

それは今さらどうでもいいな  
さっきの話で  
こいつがあっさり見つけやがったからな」

「ぐっあ！」

ドロンジョの傷口に爪を押し付けるレイブン

「そして今!!!  
時が満ちた  
と言う訳だ」

「だが！なぜ俺に近付いた！」

「なんだそのことか  
この地方になかったからだよ

ハウエン地方はドロンジョ  
ジョウト地方はフォックス  
そして俺のシンオウ地方

そこでお前に近付いた  
ハウエン地方はすぐに  
手中に収める事ができる力をつけたからな

ここにはないならジョウト地方のお前のエリアだけだ  
お前を探すという命令を作っとな  
すぐ受け入れてくれたよ

ここに宝珠がある事を知ってて受け入れたんだからな  
よっぽどコイツは逢いたかったんだろうぜ

ほどなくしてジョニー  
お前が来た  
俺はあの夜興奮したぞ

やっと手に入れることができるってな！  
こっそり抜け出しヘルブラザーズに連絡

やつらは俺の正体をよくは分かってないがな  
そこでドロンジョに動きがあった  
フォックス一向を無視しろってな

俺がいなかったから好機と思ったんだろうな  
ハンナに連絡しなかったのは  
その必要がなかっただけのこと  
いずれにしてもおまえらに深手を負わすことができる  
うまくいけば両エリアとも俺のものになるからな  
最後まで見届けるために一緒にいたまでの話だ  
くはははっ」

「結局・・・それも失敗し  
しかも宝珠はここにあったわけだが。。」

「なんでそんなめんどくさいことをするにゃ！」

「ジョニー。。  
どうしたでやんすか？そんなに怒って^-^」

わざとらしい微笑をジョニーに向けるレイブン

「全ては宝珠のため！  
宝珠マダムを手にし  
全エリアを俺のモノとし  
宝珠による完全支配！

そのためならなんでもやるぜ？  
道化にだってなるでありんすよ？  
お・や・びん  
は～っはっはっは」

なんだか、むかついてきたあああ



## ジョニー放浪記 (34)

---

「他に質問は？  
ないようでしたら行きましょうか？」

マダム☆  
ふははは」

扉を開け出て行こうとする2匹

「許して。。  
フォックス・・  
こんな、こんなはずじゃなかった・・

あの時。。  
わたしにもっと勇気があれば」

「ドロンジョ・・」

「にゃあ～だめにゃ！」

ジョニーが叫んだ瞬間  
ドロンジョは自ら吹き抜けのホール下へと  
転落した・・

レイヴンもろとも。。

「きさまあ！」

レイヴンの叫び声が響く  
ざわ・・ざわ。。  
突然の出来事に戸惑う部下たち

「ドロンジョ！」

急いで駆け下りる二匹  
だがそこには今にも命が消えてしまいそうな  
ドロンジョしかいなかった・・

「やつがいないぞっ」  
「ほんとだにゃ！」

「無事か！ドロンジョ！」

「にゃあ～女豹ちやああん」

「あ・・・ア、ア。。

ごめんね。。フォックス・・・」

「ちっ

また手間かけさせやがって

後でゆっくり探すか・・・

きさまらを倒してからなあ！」

2階から叫びながら

3匹に襲いかかるレイヴン

今まで以上に手強いぞ！

気をつけろ！

ジョニー！フォックス！ドロンジョ！

## ジョニー放浪記 (35)

---

急なマダムの変化はそれが原因だったのね  
でも、それだけじゃない気がする・・・  
とするとあの噂は本当かもしれない  
急がないと！

「ジョニー  
ドロンジョを頼む！」

「分かったにゃ！」

ガン！

キン！

「くっ！  
なんて速さだ  
避けるので精一杯だ」

「ぐっ！」

うるの攻撃を受けたキズに  
レイブンの攻撃が当たる

「フォックス  
がんばるにゃ～」

「さすがだなフォックス  
ここまで避けるとは正直思わなかったぞ」

「だが、これはどうかな？」

不規則さがさらに増し  
予期せぬ動きをしながら  
あらゆる方向から攻撃を繰り出すレイブン

「ぐあ！」

フォックスは  
ジョニーとドロンジョの方へと  
吹き飛ばされた

「つ、強すぎる。。」

「おいらがいくにゃ！」

「む、無理だジョニー！」

目覚めるんだジョニー！

今こそ真の力を解放するときだ!!!

って・・・大丈夫か？

## ジョニー放浪記 (36)

---

'ア、ア、ア

'ア、ア、ア

ちょっとだけ目が慣れてきたにや

こう来ると

そうか

そしてこっちに動くと

やっぱりにや!

「フォックス。。

ジョニーって・・・何者・・・な。。の?

うっ!」

「大丈夫か? ドロンジョ」

うつろな目で頷くドロンジョ

「不思議なやつさ

CQCを始めて見たのに俺の動きを目で捉えてた

そして今やつはレイヴンの動きについていってる

有り得ないがな・・・

やつは天才かもしれん」

「それになぜか信じたくなるんだよ

不思議とな」

(ジョニー・・・がんばって)

「くそおおお!

なぜ攻撃があたらん!

ジョニーいいいい!!!!」

「イシシシ

又八の攻撃にゃんか

赤い人に言わせれば←誰? 3倍の人?

当たらなければどうってことないにや!

だにゃ!」

「おのれええええええええええええ

俺はシンオウもハウエンも支配してたんだぞ！  
それがキサマなんぞに

キサマごときに！

許さん  
ゆ～～～るさぁれぬうううううう～」

ぐおおおおおお

レイヴンの雄叫びが館中に響いた

「今度はこっちからイクにゃ!!!」

いっけええええ！  
ジョニー!!!!

## ジョニー放浪記 (37)

---

ジョニーによる反撃が始まった  
ドロンジョとフォックス・・全員が見守った  
これがCQCの真髄ともいうべき戦いに・・

押されては引く  
引いては押す  
爪も牙も使わず

まさにジョニーのために生まれた技といってもいい  
そう思った2匹だった

一方のレイヴンは気追い込んでしまい  
余計に空振りが目立つ  
こうなってしまうのはジョニーの勝利は  
確定していた

「又八  
もう観念するにや  
やるだけ無駄にやおいらには勝てないにや」

「ふう！ふう！」

(くそおお  
こうなったら・・)

空中高くジャンプするレイブン

「ジョニー！気をつけろ！  
何かしてくるぞ！」

「分かったにや  
イー(。ω。)>」

「・・・・」←一同

そしてそのまま右奥の隠し扉へと飛び込んだ

「にやあ！」

「何！  
追うぞ！俺も行く！」

「ダメにゃ！女豹ちゃんを守るにゃ！  
おいらがいくにゃ！」

くそ！くそくそくそくそくそくそくそくそくそ  
この俺があんな奴に！

あと一步のところだ！

通路の先に着き扉を開けるレイブン

だがそこにいたのは

「な！なんでキサマがそこにいる！  
どうしてここに。。」

「あら  
久しぶりねレイブン  
探しモノはこれかしら？」

いったい何を目的に逃げたのか  
そしてまた新たなキャット？



## ジョニー放浪記 (38)

---

あれ？

又八は誰と話してるのかにゃ？

「又八！  
待つにゃ！」

次の瞬間

レイブンはジョニーのほうへ吹き飛んできた

「にゃああ  
にゃんだあああ」

レイブンはそのまま  
気を失ない動く気配がない  
その向こうには1匹の猫

「うにゃにゃ！  
にゃんでそこにいるにゃ・・・」

「あら  
ジョニー  
あなたのおかげで助かったわ」

「ど、どういことにゃ・・・」

「話は後よ」

そう言いながらレイブンを  
捕縛する

「こちらピクシー  
カーネルニャンダース応答して  
総司令応答してっ！」

無線らしきもので交信しているようだ

「ピクシー？  
にゃんでピクシーにゃ？」

「しっ！  
黙ってて」

( (こちらニャンダース  
聞こえておる  
上手くいったんだな) )

無線特有のくぐもった声が聞こえる

「はっ！  
たったいまレイヴンを確保  
応援よろしくお願いします」

( (そうか  
至急そちらに増援を送る) )

「はっ！  
総司令！」

「にゃんにゃんだ？総司令って？  
というか。  
その手に持ってる子は誰にゃ？」

「ジョニー！  
話はあと！  
今すぐマダムのところへ行かないと  
命が危ないの！」

「そ、そうだったにゃ  
女豹ちゃああああん」

「ジョニーはレイヴンを連れて来て頂戴」

「えええ」

「ぐだぐだ言わない！」

「イー(。・ω・)>」

「……」

ピクシー？  
カーネルニャンダース？  
誰だおまいらああああ



## ジョニー放浪記 (39)

---

ホールへ到着した4匹

ジョニー

ピクシー

赤子

そして気を失ったレイヴン

すると

「はっ！

キャメロン！

うっ！」

とドロンジョ

「キャメロン？」

「もしかその子の名前かにゃ」

「そうよジョニー

その子は

ドロンジョとフォックスの子

キャメロンなの」

な、なんだってええええええええええええええええ

と中でも一番驚いているのは

もちろんフォックスである

「それよりドロンジョ

宝珠はどこ？

あなたの命が救えるかもしれないの

教えて！」

「ほ、宝珠はその子の首飾り n . . .」

「これね」

とその首飾りを取り出すピクシー

「これが宝珠なのかにゃ

わあ～綺麗だにゃあ～」

キラキラと輝くそれは  
まさに宝珠であった  
それを一欠片折りドロンジョに飲ませる

「ほら  
飲み込んで」

「んぐ」

ミルミル精気を取り戻すドロンジョ

「にゃ！」

「な、なに！  
そんなバカな！こんなことってあるのか！」

「そうよ  
むしろこちらのほうが正しい使い方なの  
レイヴンはそれを改良して  
劇薬ソドムを開発しようとしていた」

「っていうかにゃ・・・」

「なに？ジョニー」

「おいらはなんでアンジェリーナちゃんが  
ここにいるのかが不思議なんだにゃ・・・  
それにキャメロンって。。  
ほんとにフォックスと女豹ちゃんの子供なのかにゃ？」

「ええそうよジョニー  
キャメロンは・・・」

と言いかけたピクシーことアンジェリーナ

「待って！  
それはわたしから説明させて・・・」

容態が落ち着き起き上がるドロンジョ

「ああ頼むドロンジョ  
俺にはさっぱり。。」

アンジェリーナがなんでここに！

そしてキャメロンの誕生秘話？

## ジョニー放浪記 (40)

---

「いい？よく聞いてフォックス・・・  
実はあなたとの間に  
この子を宿していたことに気付いたの  
けどあなたはもっ去ってしまった  
でもわたしはこの子を育て  
そして宝珠を見つけるって決めた  
そうすることであなたにまた逢える気がしたから」

「・・・」←フォックス

「でも・・・  
さっきも言ったように  
はひふへほ・・・つまりレイヴンだけど  
レイヴンにこの子を幽閉されてて  
手も足も出なかったのもあったの  
幸い宝珠はこの子の首飾りにしておいたから  
誰にも見つからなかった正解だった」

(それで変わってしまったって思ったんだにやあ  
ハンナちゃんが知ったら、きっと喜ぶにや)

「だけど・・・あなたに・・・  
いえ・・・ここにいるみんなに迷惑をかけてしまった  
だからわたしはレイヴンもろとも。。」

「ばかやろう・・・  
それを知ってれば俺はすぐに駆けつけたぞ！」

「言えなかった・・・  
あなたにも。。誰にも・・・  
強大過ぎる力。。そしてこの子の幽閉・・・  
あのまま手を組むしかなかった  
わたしはリーダーとして失格。。

もっとわたしに勇気があればって・・・  
自分を責めてみたけど。。答えなんか見つからなかった  
けど・・・  
こうしてあなたは来てくれた」

「ドロンジョ・・・」

見詰め合い抱き合う2匹

「はいドロソジョ」

とキアメロンを差し出すアンジェリーナ

「にゃあ〜」

と

とても愛らしい声で鳴くキアメロン

「ありがとう・・・アンジェリーナ  
やっと。。やっと逢えたね・・・  
キアメロン。。」

感動の再会を果たした親子である

「この屋敷に匿われてるって知ってた・・・  
だけどそこがどこだか分からなかった  
まさかあんなところにあったなんて。。」

「そうだったんだにゃあ〜」

「で・・・  
アンジェリーナちゃん  
なんでここにいるにゃ？」

「え？  
知りたい？どおしても？」

激しくかぶりを降るジョニー

「俺も知りたい」

とフォックス

「しょうがないわねえ  
あんたたちってば」

微笑むアンジェリーナ

はい！先生！



あたしも知りたいで～～～す

## ジョニー放浪記 (41)

---

「わたしはねジョニー  
シンオウ地方のCIAエージェントなの  
コードネーム ピクシー」  
「エージェント？  
え？  
ピクシー？  
CIAってなににゃ？」

「Cat Intelligence Agency (猫諜報機関)  
略してCIA  
主に重犯罪の取締りをしてるの  
そのエージェントのひとりがわたし  
カーネルニャンダースが総司令官なの  
ジョニーは声は聞いたわね」

「アンジェリーナちゃん・・・」  
「何？」  
「おいらは夢でも見てるのかにゃ？」

「いいえ見てないわよ  
まさかジョニー放浪記まで  
夢オチにしたくないもの←おい  
そこでね  
わたしは以前からマークしてたレイヴンの調査に赴いたの  
けどシンオウには姿がなかった  
そこでここハウエン地方にやってきた  
けどあと一步のところでもた行方をくらましたの  
後はあなたたちが聞いた通りよ  
キャット☆ザ☆キャットに潜入してね  
そしてあなたのジョウト地方に行った

あなたに逢えたのは偶然だったし  
短期間だったけど飼い主さんにもお世話になったわ  
色々話せた中で興味深い話を聞いた  
不思議な鏡があるあなたにね

レイヴンの目的が宝珠  
その場所が分かれば必然とレイヴンに辿り着くから  
そこでわたしはこの地方にもある伝説  
宝珠の話をしたの

あなたは知らなかったみたいだから

ちよっぴり嘘ついたけどね」

とウィンクをジョニーに向ける

「だからか・・・

芳醇で至高の一品のはずなのに

ジョニーの話だと

惚れる、はれるとかズレがあるなと思ってたんだ」

(こんな効果があるとも俺は知らなかった  
レイブンもおかしなことを言っていたし・・・  
宝珠マダムを改良しての劇薬ソドムなのか。。  
伝説はやはりただの伝説だったな)

「おいらを騙したんだにゃ！」

「あら

そうでもないわよジョニー

あの夜は本気だったから」

「(/ω＼) ハジメカシイ・・・(/ω＼) 和・・・」

↑ジョニー

「・・・」←一同

「まあでも

おかげでこうして

逮捕も出来たし

宝珠も手に入った

これで患者も救える

一石二鳥だわ

ちょっと使ったけどね(>ω・´★)」

「だがそれだけじゃ足りないだろ？」

「培養すればいいから大丈夫よ

少し時間はかかるけどね

効果も大きすぎるから研究も必要だし」

「って勝手にもってちゃうけど

いいよね？」

「ああ

俺たちは構わん

なあドロンジョ」

「ええ

むしろそんなやばいもの願い下げ

そのせいで大変な目にあっただし・・・

だけどころやってまた巡りあえた。。

慕ってくれてる部下もいるし」

「そうでございますマダム！」

と1匹の猫が前が出る

執事猫アレンだ

後ろのほうには、ぶん太もいる

「マダムさえよろしければ。。でございますが・・

わたくしどもは

いつでもお側におります^-^」

顔を見合わせるフォックスとドロンジョ

「ああ

俺からも頼む後処理もあるからな

だが俺は厳しいぞ」

「イー(。ω・)>」

「ジョニーはどうするの？」

とアンジェリーナ

「。。。。」

果たしてジョニーが出した結論とは

## ジョニー放浪記（42）

---

「おいらは・・・  
やっぱりアンジェリーナちゃんが・・・  
好きにゃ！  
大好きにゃ！  
愛してるんだにゃ！  
だからっ!!!!  
おいらもCIAになるにゃ！」

「あら！ちょうど良かった  
あなたならこっちから大歓迎よ☆  
さっきの戦いで  
スカウトしようって思ったもの  
レイヴンを逮捕できたのも  
あなたが追い詰めてくれたお・か・げ☆  
あなたいいセンスよ」

「へ？  
ってことは  
アンジェリーナちゃんもおいらが好きってことかにゃ？  
ううれすういいにゃああ〜」

（ジョニー。。それは違うと思うぞ  
だが言わないでおこう）

と決めたフォックスである

「さてと  
もおすぐ増援もきそう出し  
わたしはこいつを連れて本部に戻るわ  
ジョニーも来てね」

「その前に・・・  
レオンに挨拶してからにするにゃ」

「そうね  
色々あったけど結局あなたの飼い主には  
感謝しないとね」

数日後

「よし！  
準備万端にゃ！  
この手紙を置いてっと」

「おいらはいなくにやるけど  
立派なCIGに  
ん？  
CAP  
なんだっけかにゃ・・・  
そうだ！  
GIジョーになるにゃイー(。ω。)>」

どれも違うぞジョニー・・・

「今までありがとうにゃ～レオン  
とお嬢さま」

「やるわねジョニー  
ついで調が気に入らないけど・・・」  
「はいお嬢さま・・・」  
「あのスケベ猫がねえ～」  
「お言葉ですがお嬢さま！」  
「はいはい  
ちょっぴりなんでしょ？  
あら？泣いてるの？レオン」  
「と、とんでもございません！  
目にゴミが入っただけでございます！」  
「そお  
ならいいけど」  
鏡の間を後にする二人

ががが

ザザザがが

(どうやら失敗に終わりました  
【あいうえお】さま  
宝珠マダムはCIAの手に)

( (まあよい  
【星】は奪われたがまだ【月】と【太陽】がある  
お前は至急こちらに戻れ  
【かきくけこ】 ) )

(はっ！イー(。ω。)>

了解しました)

((【はひふへほ】にしてはよくやったほうだ  
劣性遺伝子にしてはな  
それ自体やつは知りもしなかったがな  
しかし・・驚くべきはジョニーか。。))

【恐るべき50音計画】と書かれたレポートが  
古びた机の上に置かれていた

【FND】